

まえがき

この懇談会が特定研究に結集してから、はや三年が経過した。その間、端的につきつけられている問題があまりにも多く、各研究者は独自の方法論を駆使しながらも、問題解決に迫られてきたというのが実相ではなかろうか。そして問題を掘り下げてゆけばゆくほど、改めて総合への必要性が痛感されるに至っている。ある者は mono-discipline の中に総合性を見出し、ある者は Intra-discipline の中に、またある者は multi-discipline の中に、更にある者は Trans-discipline の中に総合性を見出して、それぞれの場で努力が続けられてきた。

第I編ではそれぞれの方法論にもとづく研究成果が集録されている。すなわち、水域では、諏訪湖の推移が魚貝類相の変遷と移殖放流種、放流年次と漁獲量の推移等を通じて明らかにされると共に、アオウキクサを利用した環境モニタリングや河川の水性植物を利用した水質モニタリング等に関し、基礎的研究が報告されている。また陸域では、キシヤスデの生態が次第に明らかにされると共に、美ヶ原高原南斜面を中心に、亜高山帯における小哺乳類の分布と生息環境、同地域における植生の組成と構造等に関する研究が報告されている。更に、緑による土地保全や食糧生産を視野に入れて、簡略化された潜在生産力に関する提案が行なわれている。

第II編では各研究メンバーの環境観が中心に集録されている。すなわち、環境概念の再検討が哲学されると共に、鳥類や森林生態の核心に迫った人達の環境観、自然に対する人間の立場の強・弱二面性とそれらを通じての調和の希求、また環境問題の解決にとって不可欠ともいべき教育問題等が述べられている。更に、国際シンポジウムを中心に、失なわれかけている貴重植物の保護についての紹介と提案がなされている。最後に、環境科学を模索する人達にとって極めて示唆に富む特別寄稿「環境の構造と環境科学」：吉良竜夫先生（大阪市立大学教授）の論文が掲載されている。これは1979年9月、信州大学理学部における特別講演を中心にまとめられたものである。

以上のように、幾多の成果がおさめられているものの、個別科学の集合体から真の総合化への指向という点ではなお大きな宿題が残されているように思われる。学問の能率的発展のために、ひたすら細分化の道をたどってきた個別科学は、母体である、かつてのバランスのとれた総合的、包括的科学を時には振り返ってみる必要があるのではなかろうか。それは個別科学に反省と巾を与えると同時に、新しい総合性創出への前提を提供するかもしれない。

いずれにせよ、方法と体系を常に問いなおす事は、科学の α であり ω である。

信州大学環境問題研究教育懇談会

研究代表者 松 田 松 二